

## 第6回 今後の共助による地域づくりのあり方検討会

■日 時:平成 30 年3月7日(水) 15:00~17:00

■場 所::3×3 Lab Future

■出席者:

【委員】

入江委員、卯月委員、奥野委員、工藤委員、松田委員、坂井委員、村上委員

事務局からとりまとめ(案)について説明の後、意見交換が行われた。主な内容は以下のとおり。

### ■ CSVの表現の修正

- ・ 4ページが一番上「一定の収益を確保しながら地域課題を解決していく CSV」の表現を、「地域の課題を解決しながら、自らの競争力を向上させる」へ変更した方がよい。企業によっては一定の収益確保だけではなく、マーケットシェアや売上高を最大にする目的を持った行動がみられるケースもあるため。

### ■ 地方大学に関する記述の修正

- ・ 13ページの「地方大学は、地域活動を担う人材を積極的に引き受け、修士や学位を与えて専門職として…」の部分において、「修士や博士の学位を」と断ることが正確。
- ・ 「地方大学」の表現は「各地域の大学」という表現にしたほうが良い。地域づくりに関する分野の博士課程がある地方国立大学は少なく、修士課程も一部の分野に限られる場合が多い。この表現は再考すべき。

### ■ 起業を含めた地域活動の担い手づくり

- ・ 若い人の起業に注目すべきではないか。「地域活動」は、公共の志を持ってする場所である、とされているが、起業して関わる人は少ない。ボランティア、SB、地域づくり、公共の志は必要だが、次の段階として、高齢者や女性の起業もあるが若者の企業にプラットフォームを結び付けていくことを、将来の方向性としてやっていってもいい。
- ・ ベンチャーやIT企業の設立という起業に限らず、市民や住民が生活している中で少し困っているような課題を、小さな工夫で解決していくような持続可能な共助システムの構築の中に起業や時間限定のプラットフォームもあるのではないかな。

### ■ ソーシャル・キャピタルという表現を使用

- ・ 2ページの「(1)共助による地域づくりの意義」のところ、「人と人との結びつき」を「ソーシャル・キャピタル」という表現にすると良い。日本だけでなく、世界でソーシャル・キャピタルという言葉が使われて、アジア的な特質である人と人とのつながりは世界で再注目されている。

### ■ NPOの課題に関する記述

- ・ 3ページの(1)③NPO 等に関する記述で、「一方で、社会的な信用を得るための情報公開が不十分な団体も見受けられる」という記述は事実だと思うが、ここで書くことに適して

いるのか。無理に課題を書く必要はないのではないか。あとの文章にもつながっていないので、再考の方がよい。

- ・ 会計方式にも課題があると考えている。NPO で複式簿記を付けている団体は少ない。会計をきちんとしていないところに会費を払うや寄付を促すのはどうか。

#### ■ 自助・公助・共助の関係性

- ・ 5ページの(2)②既存の社会システムの限界について、特に3段落目に公助の限界が指摘されている。自助、共助との関係が数行で書かれているので、2ページ(1)と関係が深く、ある部分は重複してもいいので、自助、共助、公助が今回の地域づくりでどういった関係になっているのか、共助の重要性をもっと書いてほしい。

#### ■ 先駆的取組の先駆性

- ・ 8ページ、9ページの(3)①②③の共助による地域づくりの中で、タイトルに「先駆的な取組」とあり、寄付型、地域循環型、投資型と3つに分かれているが、本来の既存組織の役割を果たす形で良い取組をしている事例がある。
- ・ 例えば高知のこどもファンドは寄付型に分類していただいたが、確かに寄付型にも捉えられるし、行政の補助金ということもできる。資金提供した団体に継続的に伴走支援をしている点を取り上げると高知も横浜も先駆的である。
- ・ 世田谷区で地域共生の家という事業がある。空き室・空き家を地域の景観等として残したい、と起業して準公共施設として有効活用している事例がある。既存組織で人とカネとモノをうまく連携させて使っている。

#### ■ 地域外連携の重要性

- ・ 3ページの(1)④企業の記述で、「企業は、その本拠地が地域内にあるか否かにかかわらず、高度な知見やノウハウを持つ人材の供給・・・」とあるが、非常に根幹的で大事。連携するのは自治体内の企業でなくても良い、海外の企業でも良く、報告書を通して理解が進むとよい。

#### ■ ヒト・モノ・カネを共有するプラットフォームの重要性を伝える工夫

- ・ 10ページのプラットフォームについて、「ヒト」「モノ」「カネ」というリソースだけ用意しても、プラットフォームが機能していないとうまくいかない。この点について、問題意識を持っていないと、一般の方が読んだときにイメージがつかないのではないか。
- ・ 大事なことなので、事例などを入れて、こういうものだということが伝わるようにできればよい。

#### ■ プラットフォームのマネタイズ

- ・ 公共財的な役割を担うプラットフォームや、そのプラットフォームの担い手となる可能性の高い中間支援組織のマネタイズや持続性をどう確保するか、どこからどういう補助金や業務委託を引っ張ってくる、といった財務的な持続性をどう担保するかは、今後ますますこのような領域で課題やボトルネックになってくるとされるため今後の検討のタスクとして、入れておいて欲しい。

#### ■ プラットフォームマネージャーの性質

- ・ プラットフォームマネージャーは同じ「ヒト」でも違う。ヒト・モノ・カネとプラットフォームマネージャーとの関係を整理してほしい。ただし、外部から来た人がプラットフォームマネージャーに急にはなれない。マネージャーは担い手の中から育っていくもの。
- ・ 教育する機関を設けて、実践を伴いつつ磨くということかと思う。どう育成するのかをもう少し深く詰められたらよい。

#### ■ 地域住民として高齢者の存在を明記

- ・ P3の地域住民に高齢者を明記しておくべき。入っているのかもしれないが、高齢化で能力のある高齢者が地域にたくさんにいるので書いておいてほしい。
- ・ プラットフォームについては、イメージする像が人によって違う。例えば、札幌のエリマネ、南池袋公園のよくする会、それぞれサイズや内容が違う。プラットフォームの作る土台の大きさ、フェーズなども異なる。
- ・ 今度の都市公園法改正で公園協議会を作っていく方向性が位置づけられており、今後どのようにプラットフォームを作っていくのかについては可能性がある。

#### ■ 意識の高い人に止まらない地域づくり

- ・ 人口減少の中で共助による地域活性化は皆大賛成だろうが、最大の問題は一部の意識の高い人とどまっただけで大きなうねりになっていないこと。
- ・ この報告書にわくわく感がたりない。参考資料3の先駆的取組において、主語が組織になっているが、人を主語にする方が読む手がわくわくしない。わくわく感と同時に制度設計が必要となる。プラットフォームがあっても動かない場合があるが、それをどうやって解決するのかについても検討が必要。

#### ■ キャリアプランの流動的な時代の共助社会の担い手

- ・ 人の生き方も大きく変わってきており、終身雇用、単線リニア型のキャリアプランから変わってきた。また、流動的になってきた。これからもっと変わり多元化していくのだと思う。身の置き場が複数になっていく社会担っていく中で、この報告書をどのような立場であっても他人ごとではなく一人称で読んでもらえるものにすることが大事と感じた。
- ・ 内閣府のNPOのデータベース、1枚ペラでURLも貼ってない。NPOと財団法人など活動自体が似たようなものであっても異なったもののように扱われているなどがある。現在は改善されているかもしれない。

#### ■ SDGsを目標とした地域づくり

- ・ SDGsがキーワードになりつつあるのではない。共助社会において、SDGsを達成するために推進するのではない。そこで、SDGsがゴールとなるのではない。このSDGsに関わる表現があってもよいのではない。

#### ■ プラットフォームの性質

- ・ プラットフォームについて、こういう風につくるものだと限定的に示すのは良くないかもしれないが、融通無碍に自由に作るということにするとよくない。そこで、都市部、地方部それ

それぞれの事例を入れるのは良い。

- ・ マネージャーはテーマによって異なるものであり、金融機関や大学など状況によって出現する主体は異なる。そのため、あなたはマネージャー、と決めてしまうのは良くないかもしれない(特定の主体をマネージャーと決めつけてしまうのは適切ではない)。
- ・ プラットフォームは2層ある。1層は基盤となっている、緩やかな情報交換を目的とするもの。定期的に緩やかに情報共有をするぐらい。異業種交流会的なもの。これはずっと続けるもの
- ・ 2層はタスクフォース型。共有できる課題を解決に取り組むもの。課題が見えてきたときに組成。そこにマネージャーが生まれる。これは課題が解決したら解散する。この二つがある。

以上